

成人向

ADULT ONLY

転載禁止



淫堕の輪廻あな

作：織房あんみつ

淫墮輪廻のあてな

第一章『はじめ』

目次

零 遊星からのオデッセイ

壱 魔を狩る者たちの日常

弐 そして絶望が始まる

参 遅すぎた覚醒

肆 地獄の先の未来

伍 二人に残ったものは

陸 秘めごと

零、遊星からのオデッセイ

天の川銀河、太陽系のとある宙域で彼は数十年ぶりに声を上げた。

「生体反応だ！」

ガルオメーア族の戦士、デスミンチの歓喜に満ちた叫びは、がらんとした操舵室に吸い込まれていく。

せっかくの感動にも、返事を返すものはいない。

彼を除く同胞は、一人残らず冷凍睡眠で夢の中なのだ。

数千億という規模で一大文明を築いた彼らの人口は、今やこの旗艦クイーン・リーの搭乗者、百名足らずを残すのみ。

原因は、五百年ほど前から始まった急激な少子化にある。

そもそも彼らの一族は、不老長寿に加えて繁殖力も旺盛。

生物として種類が数世代離れていようが、お構いなしで受精が可能だった。

微生物が昆虫を、昆虫が爬虫類を、爬虫類が鳥類を、鳥類が哺乳類を。

下剋上を繰り返すようにあらゆる生物を一族に取り込んでいく。

そしてその度に彼らは強く、賢くなっていた。

彼らが母星の生物を同族に置き換え終えるのには、そう時間はかからなかった。しかし、それが破滅の始まりでもあった。

一族の血は濃すぎたのである。

他種族とも交配できるほどの繁殖力は、近親種との交配を繰り返すごとに、逆に彼らを蝕む呪いへと変わりはじめた。

呪いの正体はメスの不足。

元々七対三ほどの割合でオスの多い社会構造だったが、突如として急激に先鋭化したのだ。

有効な対策もなく、新生児のメス率がゼロ%になるのはあつという間で。

二百年も経つと、一族の数は数百億にまで減少した。

不老長寿とはいえ不死ではない。

一番若いメスが寿命を迎えるまで、およそ三百年。

それまでに解決策を打ち出せなければ、待つのは滅亡のみである。

この頃にはオスメス比は九十八対二までになっていて、過剰なメス尊オス卑によって若いオスは意欲がなく、世代間での争いも激化していた。

結果、ただでさえ少ない人口の減少を助長するような諍いさかいも少なくない。

行き詰った彼らが出した結論が、新しい惑星^{エサ}を探すことだった。

異星人のメスとの交配。

理論上、あらゆる生物との繁殖が可能な彼らならではの解決策といえる。

もはやこれほど僅かな可能性に賭けるしかないくらい、彼らは詰んでいた。

そうして、どうせ滅びる運命ならばと、ほとんど一族総出で宇宙へ飛び出したのが二百年前。

一族の数は百億あまりにまで減っていた。

メスの数になると一億弱。

オスメス比実に九十九対一である。

百億の一族を乗せた数十万隻の大船団。

宇宙空間の光速航行すら可能にした超科学による大移民計画。

それでも宇宙は広く、残酷だった。

寿命、事故、飢餓、病気、争い。

百年の間にあらゆる困難が、平等に彼らへと降り注いだ。

やがて生き残りが旗艦一隻になった時、冷凍睡眠による延命措置が決まる。

一族で最も若いメス、リリーの保護を最優先とした結果だ。

操舵士として選ばれたのは当時一番若く、寿命が長いであろうデスミンチ。もちろん、彼の高い能力と使命感も選抜の縁由えんゆであつた。

それから百年近く、デスミンチの孤独な旅が続いた。

いつ終わるとも知れない航海。両肩にのしかかる重圧。

それが今、ようやく終わりを迎えようとしている。

彼の身体から無数に生えたイソギンチャクのような触手の一本一本が、言いようのないほどの歓喜に震えた。

気が遠くなるような時間、この広い宇宙を彷徨つてきた。

たった一隻の探査力で目ぼしい惑星を見つけられたのは、砂漠で砂金一粒を拾う以上の奇跡であろう。

デスミンチは、目の前の青い惑星を改めて見つめる。

拾った電波から予測するに、ある程度以上の知的生命が暮らしているようだ。既に同胞たちの冷凍睡眠装置は解除してある。

これから一月ほどかけて、解凍とバイタルの安定が自動で行われるであろう。どうしようか、とデスミンチは思った。

一族は年功序列だ。

今からあの星の調査を始めて、交配の可能性が分かったとして。

いくら惑星発見の功績をもってしても、自分の順番が回ってくるのはいつになるだろうか。

そもそも、彼のような若い世代は基本的に性交の経験がない。

メスの数が少なすぎて自分まで回ってこないのだ。

冷凍睡眠で眠るリリーを眺めて、何度自身を慰めただろう。

つまみ食いさせてもらうのは当然の権利だ、とデスミンチは思った。

彼の忠誠心や使命感は、百年の孤独な時間に削られ目減りしていたようだ。

惑星の衛星にクイーン・リリーを停泊し、小型の高速探査艇に乗り込むと、まだ

見ぬ異星人のメスとの交配に、彼の触手の一本一本が滾^{たぎ}っていく。

彼らの旅が始まってちょうど二百年目の今日。

全身から触手を生やした巨大な怪物デスミンチ。

地球人類への大きな試練の一步目が、静かに飛び立った。



「——つくう……！」

たはばなさやか

立花彩佳はもう何度目かわからない絶頂に身を震わせて、それでも意識を手放さぬよう唇を噛む。

もう何時間も全身を撫で回され、乳頭や陰核は痛いくらいに肥大化している。熱い吐息が否応なしに自分が興奮状態にあることを伝えてきた。

色事とは無縁だったはずの自分の身体が、別の生き物に作り替えられていくようで怖い。

「も、もう無理です……！ 嫌、いやあ……！ もうイきたくつ！ ないよおつ！」
痙攣する身体で懇願しても目の前の怪物には通じない。

どうしてこんな目に合っているのだろう。

悪いことなんか何もしていないのに。

毎日真面目に過ごしているし、今日も塾の帰り道を歩いていただけだ。

なのに目覚めると薄暗い廃屋の中で、異形の怪物から伸びる無数の触手に、全身を絡めとられていた。

両腕両足をがつちりと掴まれていて身動きできない。

——ああ、これからこの怪物に食べられて、それで、死んじゃうんだ……。

恐怖による諦観からか、頭の冷静な部分がそう結論付ける。

そんな彩佳に対し、怪物の扱いは妙に丁寧だった。

やっと手に入った玩具みたいに、傷つけないようゆっくりと服を脱がし、肌を撫でてくる。

触手の表面からはぬるぬるの分泌液が多量に出ていて、あつという間に彩佳の身体は粘液まみれになった。

蛇のようなものが這いまわる感覚に、一気に嫌悪感が沸き上がる。

されるがままの彩佳が、異変を感じたのはしばらく経ってからだった。

——気持ち、いい……？

さっきまで鳥肌が立つほど嫌だったのが嘘のよう。

肌は紅潮し、下腹部は熱を帯びてきた。

頭がぼんやりとしてきて、漏れ出る息は浅く、荒い。

それもそのはず、触手の粘液にはメスの性感を高める成分が入っていて、ただ肌を撫でられるだけでも達してしまうほどのものであった。

触手の動きは、じれったくなる程に緩慢で、人体の仕組みを調べているよう。

あるいは焦らすのを楽しんでいたのかもしれない。

そうして全身をじっくりと撫でまわされて数時間、今もお、望まぬ絶頂に苛まれているのだった。

秘唇からはだらだらと愛液が垂れ、太ももまで流れ出しては怪物の粘液と混ざり合う。

怪物は触診するように全身を撫でつけるだけなのに、それだけで達してしまうことが恨めしく、恥ずかしい。

「もう、やめて、ください……。おうちに、帰して……」

何度目かの懇願も、通じているのかいないのか。

感情の読み取れない——そもそもどこが顔なのかもよく分からない——怪物が満足するまでじつと耐えなければいけないのだろうか。

耐える？

何を耐えているのだろうか？

ふと、良くない考えが頭によぎる。

だいたい、触手の形状はバリエーションに富んでいて、いくらでも気持ちいい使い方ができるのに、今の攻め方じゃ全然、物足りない。

浅いのだ。

もつと気持ちよくなれるはず。

ギリギリでお預けをされているもどかしさが、どんどん思考を狂わせていく。もつと気持ちよくなりたい。

これは怪物のせいだから仕方ないのだ。

メガネの奥の瞳に怪しい色香を纏わせて、彩佳は欲望の渦に身を任せた。

身体の疼きは限界に達し、気が狂いそうなほどの快感が全身に押し寄せている。今アソコを触られたらどうなってしまうんだろう。

怪物は肝心なところを全然触ってくれない。

コンプレックスだった大きな胸も、今こそ役立つ時だというのにほったらかし。考えだすともう止まらなかった。

触ってほしい。

挿入れてほしい。

こんなにたくさんいれるものがあるのに。

バケモノのくせに、弄ばないで。

彩佳は動けないながらも腰をうねらせて、目の前の触手へ秘部を擦りつけようともがく。

なのに、あと少しが届かない。

もうすこしなのに。

もつと。もつと。

焦らさないで。

「あの、触つて、いいですよっ……？ あんっ、もうっ!! お願いだからあっ! もつと気持ちよくしてくださいってばあ!!」

気が付くと、悲鳴のような懇願が漏れていた。

腰はへこへここと情けなく動いている。

でも、一度口にしてしまうとそれが本心だと分かる。

わたしはこんな化け物に犯されたがっているのだ。

途端に被虐的な興奮がふつふつと沸き上がってきた。

そして、それに応えるかのように怪物も積極的に動き始める。

乳房の先端に吸い付いて、陰核をこすり上げる。

指先や太もも、首筋に耳の中まで余すことなく責め立てて。

ありとあらゆる種類の触手が一斉に彩佳へと殺到した。

「んああっ♡そこっ……!! ぐぐうおとおおっ♡」

待ちに待った刺激にビクビクと身体が波打ち、快感に全身が震える。

ブラシのような繊毛を生やした触手はぞりぞりと陰核をなぞり、吸盤のような触手は乳首を痛いくらいに吸い上げた。

尿なのか潮なのか分からない液体が、じよろじよろと漏れだして。

顔じゅうの穴から体液が溢れる。

全身が触手の海に包まれて、どこもかしこも気持ちがいい。

触手達も彩佳の身体が気持ちいいのか、びゅくびゅくと体液を吐き出した。

その様子を見て、不思議と嬉しさが込みあげる。

もっと気持ちよくなりたい。

もっと気持ちよくしてあげたい。

「んぐううつ！ んおおおおおおっ♡ もつろお……♡ もつろ、くだしやいつ♡ ねえ？ 挿入いれて、いいんですよお……？ わたし、処女ですけどお♡ もういいからあ♡ ね？ いれてえ♡ はやくう♡」

快楽の濁流に溺れ、はしたない嬌声でねだる。

もう相手が未知の怪物だとかそんなことはどうでもいい。

とにかくこの気持ちいいことをしてくれるモノにめちやくちやにされたいのだ。

目の前の触手の一本一本からより快楽を得られるようにと、必死に、媚びるように尻を振る。

それに応えるかのように、触手の群れの中から際立ってたくましい一本が姿を現した。

他の子種を掻き出すため凶悪に膨らんだ亀頭。

無数にイボを生やした太い幹。

——あんなの挿入れられちゃったら、わたし、どうなっちゃうんだろう……♡
考えるだけで頭が変になる。

もう自分の性器がどうなっているか想像もつかない。

きつと愛液でぐちよぐちよになって、挿入れられたくてたまらなくなつて、ぱつくりと開ききつてるに違いない。

そんな想像をすることも、彼女の性感を高めるのに効果的で。

怪物も期待に応えるように、粘液をまとった肉棒をあてがうと。

ずるん、と突き入れた。

彩佳の破瓜は、かつて妄想した理想よりも数十倍悲惨に、しかしスムーズに終わった。



もつとも、彼女はすでに快感を受容するだけのメスになり果てていたので、自分が悲惨かどうかなど気にしないことは救いといえるかもしれない。

「んぐうぐうおとおっ♡」

触手の禍々しい肉棒が一息に肉壺を貫き、最奥にある子宮口を押し込むと、彩佳の口からは涎と共に、ケダモノのような絶頂の声が響いた。

一瞬息がつまり、視界に火花が弾ける。

すごい、セックスがこんなに気持ちいいんだったら、同級生が色恋に夢中になるのも納得だ。

彩佳にはもう、怪物に対する嫌悪感は微塵もない。

それどころか、愛おしくなってきた。

こんなセックス、同級生の誰も経験できないんだから。

「いいっ♡ ああっ♡ すきっ♡ すきですっ♡ あんっ、あなたも、気持ちいいですかあ？ ねえ、もつと動いていいですよっ？ あはっ、ほらあ♡ もつと、滅茶苦茶にしてくださいっ♡」

肉棒が動き出すのが待ちきれないとばかりに腰をくねらすと、ゆつくりとだが長いストロークで触手が動き出す。

硬くカリ高なそれが、彩佳の膣内をこそぎ取らんばかりに往復し、かつてない熱に下腹部がとろけていく。

全神経が快楽に支配され、まるで直接脳を擦られているかのようだ。

前後左右、縦横無尽にうねる触手の動きは彩佳のスポットをことごとく押さえており、抽挿のたびに絶頂の波が押し寄せてくる。

「おおおおおっ♡ イつつつつ♡ つつつぐう♡ おああっあんどっ！ こ、こわいい！イクつの、とまんなっ！ あはっ♡ こわ、こわいのにいつ！ きもちいいよお♡」
絶頂するたびに気持ちよさが増していくのに、終わりが見えない。

失神したり、廃人になったりしてもおかしくないほどの快楽を一度に受けているはずなのに、もっと、もっと、と求める気持ちが増え沸き上がるのだ。

それは怪物の体液によって行われる肉体改造によるもので。

彩佳の身体はすでに母体として完成していた。

自慰行為のオーガズムとは比べ物にならない絶頂は、中毒症状のように彩佳の心を蝕んでいく。

「じにゆうううう！ も、しんじやうよおっ……♡ おまんここわれりゆううっ!! あっんどっおお♡ あんっ、だめえっ♡ やめちゃダメなお!! してえ♡ もっろ

してえ……もう、わらしひんじやつてもいいからあ!! もつとじゅゆぼじゅぼする
のお♡」

命の危険すら感じるのに、身体も心も快楽に支配され、そのこと以外は考えられ
なくなっていた。

肉壺は射精を待ち望むかのようにきつく締めあげ、抽挿を悦んでいる。

膣内をかき回す肉棒に、媚肉はさすがにまとわりつき、白くねっとりした愛
液が次の侵入を迎え入れる。

うねる腰のリズムがストロークに合わせり、一体の獣のように蠢いて。

そこにはまさに、愛し合う男女がお互いを高めあう姿があった。

悦ぶメスの声に呼応するように、肉襞を擦りあげる動きが速さを増していく。

射精寸前の肉棒は一段と太く膨らみ、ミチミチと彩佳の膣内を押し広げた。

そして彼女の胎は、当然のようにやすやすとそれを受け入れる。

「あっ♡ おちんぽっ……脈打ってううっ! でるのっ!? んぐうっ!! ぐっおっ♡

あはっ♡ だしてえっ♡ しよくしゅせーし、おにやかいつぱいくだしやいつ♡」

ラストスパートと言わんばかりに、抽挿は激しくなり、それに合わせるかのよう
に彩佳も腰を打ち付ける。

「あああああつ!! おまんこっ、すごいようっ♡んっ……っくう♡ おがじぐなう!! んおおおっ♡ あちゅいつ♡ おあつ!! きてえ……だしてだじでだしでえええっ♡」

彩佳の叫びに合わせたかのように、肉棒触手が彼女の最奥に突き刺さり、大量の精液を膣内に吐き出した。

「ぐううっ!? でてりゅ♡ んぐう♡ あづいのっ……いっばいい♡ 化け物せーしでっ! いっ……いぎゅうう♡ んおおおっ♡ いくいくぐぐぐうっ♡ イぐっ、イぐうっ♡」

やけどしそうなほどの熱い精液を子宮で受け止めると、これまでで最大のオーガズムが彩佳を襲った。

気持ちよくなれるほど、もっと気持ちよくなっていく。

終わりのない快楽を知った自分はもう、普通には戻れないのだろう。

しかし、彼女は幸せだった。

ここにいれば死ぬまで気持ちよくいられるんだから。

子宮に入りきらなかった大量の精液が、情けない音を立てて足下に垂れた。